

福岡県内地域別の気象の特性について*

石井一男** 加藤忠**

はしがき

福岡県の予報は現在4地域(福岡市周辺, 北九州, 筑豊および筑後地方)について主として人口密度の大きい市周辺を対象とした予報が出されているが, これからの地域の特性を調査したものは少ない。

天気地域差が生ずる原因には, 地形によるものほかに気象現象の移動速度, 大きさ, 強さおよび経路などがあると思われる。福岡県では東西・南北の距離がそれぞれおよそ90kmしかないで, 気圧の谷, 低気圧および前線などの平均速度が毎時30~40kmだとすれば, 移動速度による差異は西と東, 北と南ではおよそ2~3時間しかないことになる。

このくらいの差異を予報に表現することはなかなかむづかしく, しかも現象の大きさ, 強さ, 経路は千差万別で, あるときは6時間あるときは半日くらいの地域差ができることがあり, 夏期の雷雨を除いては地形によるものよりもこれらが原因で生ずる差がほとんどといってよいであろう。最近レーダーによって短時間のこれらの差異は予報できる場合もでてきたが多くの場合むずかしい。

実際の予報では個々の場合の差異が問題となるのであるが, 筆者らは一応の予報者の参考資料とするため風と雨に関する平均的特性を調べた。

1. 風 向

地形による地域差の一番大きなものはなんといつても風と思われる。風の予報は県予報としては一般流を予報するが, 地域別の予報は主として人口密度の大きいその地域の中心都市を対象とし, しかも生活気象を対象とした昼間の予報に重きをおくべきであると思われる。(漁業などでは夜間の予報も必要であるが, これについては別に海上予報が出されている)

昭和32年3月から11月までの資料(日最多風向)により一般流が地形によりどのように変化するかをみると第1表ようになる。

参考のために第1図に福岡県の地形図と各市のウィンドローズ(日最多風向)を示す。

資料の関係から北九州地方は下関, 筑豊地方は飯塚, 筑後地方は佐賀の資料が代表できるものとして用いた。

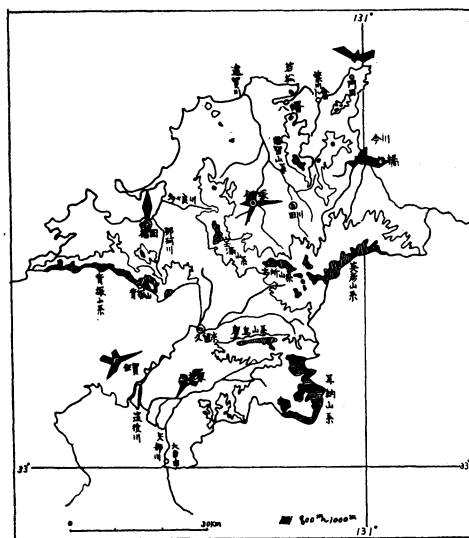
(1) 等圧線の風が北よりの場合

福岡地方はだいたい北風であるが, 筑豊地方はおおよそ60%が北風であとの40%が東風と西風にわかれる。北九州地方は北風よりむしろ東風と西風がおもになる。筑後地方は北, 東, 西の三つの風にわかれるが, さらに他の風向も現われて割合ばらばらの変化をしている。

(2) 等圧線の風が東よりの場合

福岡地方では東風より北風の方が多くなっている。北九州地方は100%が東風で筑豊, 筑後地方はおおよそ50~60%東風が吹くが, 残りの40~50%については北, 南, 西風にわかれる。

等圧線の風が西, 南およびその他の場合は資料が少ないため一般的な傾向を示していないかも知れない。



第1図 福岡県の地形図とウィンド・ローズ

* On the Local Meteorological Character of Fukuoka Prefecture

** Kazuo. Ishii and Tadashi. Kato, 福岡管区気象台
—1960年11月18日受理—

第1表 一般流の地域別の変化

	等圧線の風が北よりの場合					等圧線の風が東よりの場合					等圧線の風が西よりの場合					等圧線の風が南よりの場合					
	(%)					(%)					(%)					(%)					
	東	西	南	北	その他	東	西	南	北	その他	東	西	南	北	その他	東	西	南	北	その他	
福岡地方		9		90	1	19		9	68	北西 4	57		43				9	33	58		
筑豊地方	22	15	5	58		64	7	10	17	Calm ²	71		29				8		75	17	
北九州地方	31	35		19	北西10 北東 5	100					100						58	33	8		
筑後地方	25	26	6	32	北西 6 北東 5	48	7	31	7	北東 7	57		29		南西14		8	31	62		

	等圧線の風が南西の場合					等圧線の風が北西の場合					等圧線の風が北東の場合					等圧線の風が南東の場合					
	(%)					(%)					(%)					(%)					
	東	西	南	北	その他	東	西	南	北	その他	東	西	南	北	その他	東	西	南	北	その他	
福岡地方		12	58	25	南西 4		25 (北西含)		75		25		75			25		50	25		
筑豊地方		14	77		北, 東 9		67		33		36		9	55		50		50			
北九州地方	30	43	17		北西10	50		12	北西38		36 ²⁸ (北西含)		36			75		25			
筑後地方	4	22	74			88		12			45		36 ^{西, 南, 北 東 28}			75		25			

(3) 等圧線の風が西よりの場合

北九州地方は100%が西風であるが、福岡地方は西と北風の半々に別れ、筑豊、筑後地方は西と南風とに別れている。

(4) 等圧線の風が南よりの場合

筑豊、筑後地方は南風がおもになるが、福岡地方は北風が、北九州地方の場合は東と西風がおもになっている。

このように福岡地方はおもに北風が吹きやすいことがわかるが、これは同地方が低気圧の接近や冬期の季節風などの特別な気圧配置のとき以外はほとんど海陸風が顕著で、主風向が日中になるためと思われる。

また北九州地方は気圧配置にかかわりなく、東と西の風が卓越しているが、これは同地方が特殊な地形にあるため、実際には門司市付近は下関の風と一致しているかも知れないが、他の北九州地方に当てはまるかどうかは資料がないのでわからない。筑豊、筑後地方はだいたいのにおいて東西および南北の風が卓越している。

次に一般流がどのような気圧配置のときに地形によって変化するかを天気図によって調べてみるとだいたいのような場合に起こっている。

(1) 北高型の場合(気圧配置よりみた風は東より)(第2図参照)

高気圧の中心がまだ東経130°線の西側にあるときに

は、福岡、筑豊地方では東風にならずに北風が吹く。筑豊地方ではさらにその北風が西よりになることもある。

第3図はその中心が日本海にはいて他の地方は東よりの風になっても福岡地方だけは北風のときが多い。

(2) 低気圧が九州南岸を東進する場合(第4図参照)
他の地方は東風が吹くが福岡地方は北風である。

(3) 低気圧が九州南岸を東進して、そのあとから大陸高気圧が張り出してくる場合(等圧線が九州付近で北北西から南々東に向かっているとき)(第5図参照)

福岡地方では北風が吹くが、筑豊、北九州、筑後地方では西よりの風となる。

(4) 低気圧が発達して九州中部以南を東進する場合は、だいたい全地域とも東風。

(5) 大陸高気圧が張り出して等圧線が九州付附で北々東から南々西に向かっている場合(第6図参照)

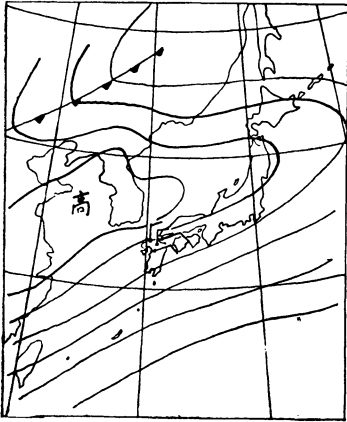
福岡、筑後地方は北よりの風だが、筑豊、北九州地方では東よりの風になる。

(6) 弱い移動性高気圧が東支那海(多少南に偏するとき)に東進した場合(第7図参照)

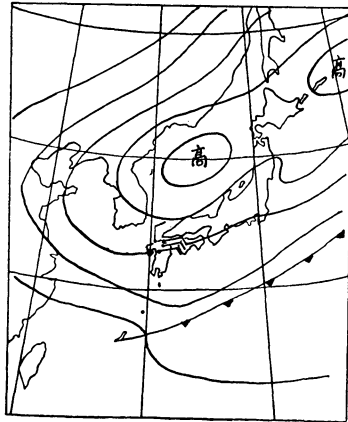
福岡、筑豊地方では北よりの風だが、北九州地方は西風、筑後地方は南風となつている。

(7) 九州が移動性高気圧の西端になる場合(第8図参照)

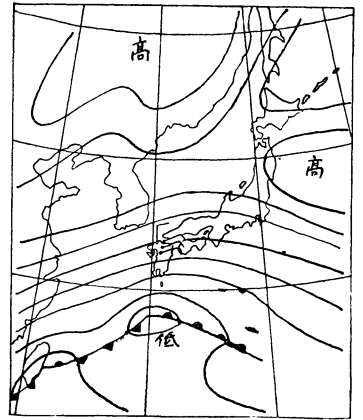
北九州、筑豊地方は東風、筑後地方は南風、福岡地方



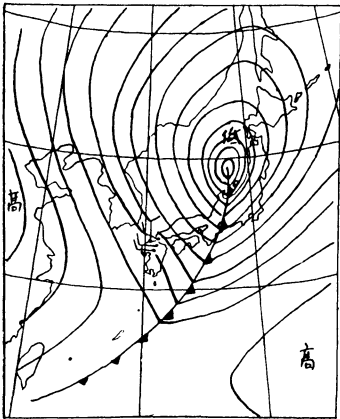
第2図 昭和32年11月21日9時



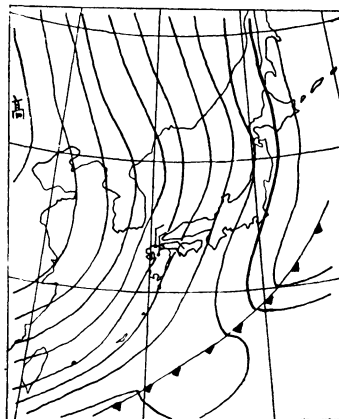
第3図 昭和32年9月14日21時



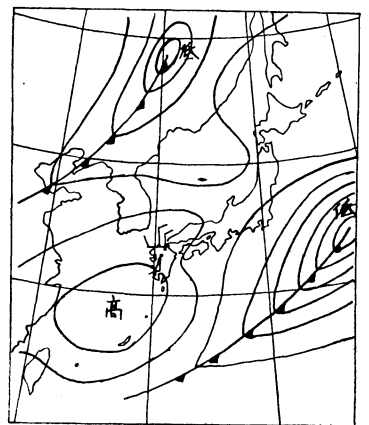
第4図 昭和32年11月25日21時



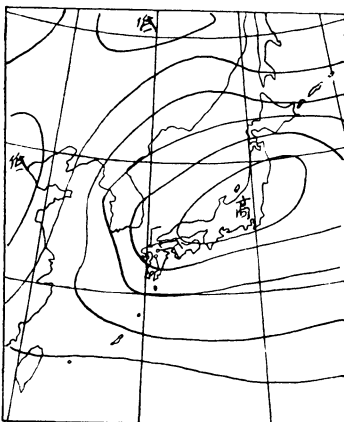
第5図 昭和32年12月13日9時



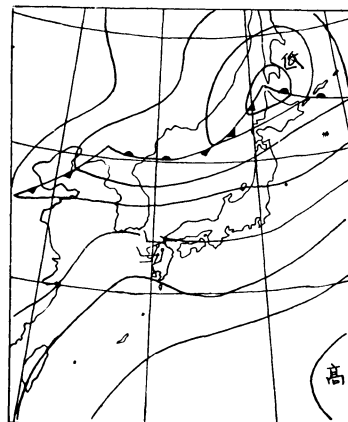
第6図 昭和32年10月17日21時



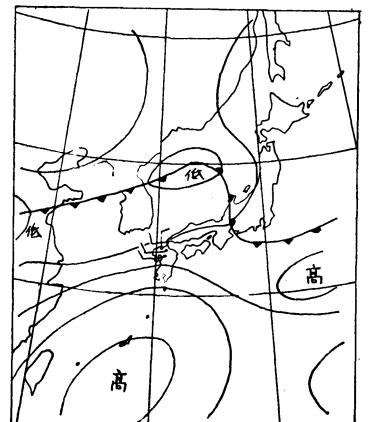
第7図 昭和32年5月30日21時



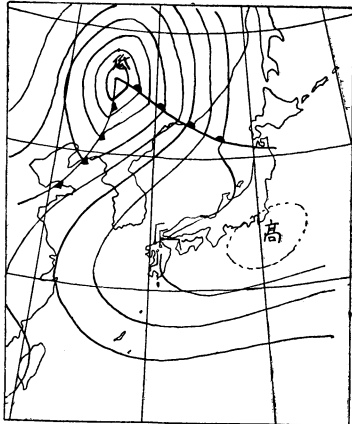
第8図 昭和32年11月9日9時



第9図 昭和32年6月20日9時



第10図 昭和32年7月18日9時



第11図 昭和32年8月27日9時

は北風が吹く。

(8) 太平洋高気圧が張り出し、九州付近の等圧線は南西の風の場合(第9図参照)

南西風は割合吹きにくく福岡、筑豊地方は南より、北九州、筑後地方は西よりの風となる。北九州地方は等圧線がほぼ南北の場合でも東風になることもある。

(9) 太平洋高気圧が衰えてくると他の地域は西よりの風だが、福岡地方は北風である。(第10図参照)

(10) 太平洋高気圧が北偏し、その峰が九州南部くらいにある場合(第11図参照)

福岡、筑豊地方は北より、北九州地方は東より、筑後地方は南よりの風が吹く。

(11) かなり大きな台風が東経130°線を北上する場合、その中心が沖縄付近までは他の地方は東よりの風だが福岡地方は北よりの風となっている。

(12) 台風が九州の西側を北上する場合、その中心が緯度で九州中部をすぎてから全域とも南の風となるが、それまでは東よりの風である。

2. 平均風速

次に風の強さはどのような分布をするかをみるため、日平均風速を季節別にして福岡を1とした場合の%を出すと第2表のようになる。

3. 海陸風

福岡が一番顕著で筑豊地方も福岡が海陸風の吹く場合だいたい同様な傾向を示すが、筑後地方の場合は昼間の風が北、西、東の風に別れる。筑後地方はあまり顕著でなく割合風向の変化が多い。北九州地方もある程度海

第2表 地域別平均風速

	春	夏	秋
福岡市, 周辺(福岡)	3.2m/s 100%	3.0m/s 100%	2.6m/s 100%
筑豊地方(飯塚)	2.3 70	2.8 93	1.8 69
北九州地方(下関)	5.3 170	4.8 160	4.2 160
筑後地方	(佐賀) 2.5 78	2.6 87	2.3 88
	(熊本) 2.3 70	2.6 87	2.2 85
豊前地方(大分)	2.8 88	2.4 80	3.1 120

陸風は現われると思われるが資料がないので不明である。

福岡の海陸風の月別回数は次のようになる。

月	3	4	5	6	7	8	9	10	11
回数	19	20	23	23	12	22	16	27	19

7月と9月は少なくなっている(前線と台風の影響が大きかったためと思われる)がその他の月は60~80%が等圧線に関係なく海陸風が吹いている。

海風の吹く時間を月別に平均すると次のようになる。

3, 4月: 10時~20時(10時間)

5, 6月: 10時~21時(11時間)

7月: 9時~20時(11時間)

8月: 10時~20時(10時間)

9月: 10時~21時(11時間)

10, 11月: 11時~19時(8時間)

4. 雨

昭和30年1月から昭和34年6月までの間に九州付近を通過した低気圧303個についてできるだけ前線性の雨を除き経路別、季節別に平均して28の雨量分布図を作って各地域の特性を調べた。

第3表には、経路別、季節別にして一降雨10mm以上と10mm以下に別けた回数を示す。

低気圧が対馬海峡(南鮮を含む)を通過した場合と名瀬付近を通った場合がそれぞれ、78, 52回となっており、九州中部を通った場合は25回となっており一番少なくなっている。たとえば名瀬付近を通る場合は10mm以下20回のうち13回は0~1mm程度の雨である。また屋久島、名瀬間の場合10mm以下6回のうち3回は0~1

第3表 低気圧の経路別の降雨回数

		1	2	3	4	5	6	7
12—2月 冬	10mm以上	8	3	5	7	4	3	0
	10mm以下	7	2	1	5	4	6	20
	計	15	5	6	12	8	9	20
3—5月 春	10mm以上	20	10	5	10	10	1	4
	10mm以下	4	2	1	8	11	15	13
	計	24	12	6	18	21	16	17
6—8月 夏	10mm以上	19	11	7	0	3	1	2
	10mm以下	8	1	1	5	3	3	9
	計	27	12	8	5	6	4	11
9—11月 秋	10mm以上	9	3	2	2	7	2	1
	10mm以下	3	1	3	1	1	3	3
	計	12	4	5	3	8	5	5
合計		78	33	25	38	43	34	52

(注) 1. 南鮮, 対馬海峡通過 2. 九州北岸通過
3. 九州中部通過 4. 九州南岸通過 5. 屋久島付近 6. 屋久島, 名瀬間通過 7. 名瀬付近通過

mm程度の雨となっている。このように屋久島から名瀬以南を通る低気圧では、一般に福岡県に10mm以上の雨を降らすことはまれでほとんどが0~1mm程度となっている。

I 雨量

第4表には雨量分布図から季節別、経路別に山岳地方を入れた6地域のだいたいの平均雨量とその順位を示す。この表から季節別に特性をみる次のようになる。

冬 期

九州北岸および九州中部の経路は低気圧の位置からして福岡県に一番近いので平均雨量も多く、多少の地域差も認められるがその他の経路ではあまり地域差もなく、九川南岸を通る場合は、低気圧の位置に比べ雨量が少なくなっている。

秋 期

九州南岸の経路が雨量が一番多く地域差もかなりあり、とくに山岳では多くなっている。その他の経路も多少の地域差はあるが、九州中部を通る場合は、低気圧の位置に比べ雨量も少なく地域差もほとんどない。

夏 期

梅雨の雨もはいつているので九州中部以北の経路が他の経路に比べ雨量はかなり大きく地域差もはっきりと出ている。特に九州北岸の経路は福岡県を通過するだけに雨量も地域差もはっきりしている。その他の経路でも若干地域差はあるが雨量は少なく、特に九州南岸を通る場合は低気圧の位置に比べ雨量が少なくなっている。

第4表 経路別、季節別の平均雨量とその順位

		春				夏				秋				冬			
		mm		mm		mm		mm		mm		mm		mm		mm	
		位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	位	
低気圧南 北九州 筑豊 海峡通過 の場合	福岡	20	40—45	20—25	10	4	3	3	2								
	北九州	20—25	40	30	10	3	4	1	2								
	筑豊	25	40—50	25	10	2	2	2	2								
	後前山	30—35	50—55	30	10—15	1	1	1	1								
	豊山	20	30—40	20	10	4	5	4	2								
低気圧九 州北岸 通過の場合	福岡	20	60	25	10—15	4	3	2	4								
	北九州	25	70	20	20—25	2	1	3	1								
	筑豊	25	55—60	20—30	20	2	4	1	2								
	後前山	25—35	65	15—20	15—20	1	2	5	3								
	豊山	20—25	45—50	20	15—20	3	5	4	3								
低気圧九 州中部 通過の場合	福岡	25—30	30	10—15	15—20	3	5	1	3								
	北九州	25—30	35—45	10—15	20—25	3	2	1	1								
	筑豊	30	30—35	10—15	20	2	4	1	2								
	後前山	35—40	35—50	10—15	15	1	1	1	4								
	豊山	30	30—40	15	20—25	2	3	2	1								
低気圧九 州南岸 通過の場合	福岡	15	1—2	20—25	5—10	1	2	4	2								
	北九州	10—15	1—2	30	10	2	2	3	1								
	筑豊	15	0—1	30	10	1	3	3	1								
	後前山	15	0—1	30—50	10	1	3	2	1								
	豊山	15	2—3	35—55	10	1	1	1	1								
低気圧屋 久島付 近通過の 場合	福岡	15	5—10	20	15—25	2	3	4	2								
	北九州	15	10	30	20—25	2	2	1	2								
	筑豊	15	10	25—30	25	2	2	2	3								
	後前山	15	10—15	20—25	20	2	1	3	3								
	豊山	15—18	10—15	20—25	20	1	1	3	3								
低気圧屋 久島名瀬 間通過の 場合	福岡	2	8—10	10	5—8	3	2	3	3								
	北九州	2	10—15	10	8	3	1	3	2								
	筑豊	2	10—15	10—12	8—10	3	1	2	1								
	後前山	5	5—7	15—20	4—5	1	4	1	5								
	豊山	2—4	5—10	15—20	5—7	2	3	1	4								
低気圧名 瀬付近 通過の場合	福岡	7	3	3—5	2	4	2	4	1								
	北九州	7—8	2	5—10	1—2	3	4	1	2								
	筑豊	8—9	3—5	5—7	1—2	1	1	2	2								
	後前山	7—9	2—3	5—7	1	2	3	2	3								
	豊山	8—9	2—3	5—6	1	1	3	3	3								

る。

春 期

九州中部以外の経路は、夏期の場合と同様他の経路に比べ雨量は多く地域差もあるが、その他の経路では雨量も少なく地域差もあまりない。屋久島, 名瀬間を通る場合は、名瀬付近を通る場合よりかえて少なくなっている。

以上のように尾久島以南の経路では四季を通じて地域差も少なく、山岳地方も特に大きな地域差はない。低気圧が福岡県にに近い方が雨量が多いとはかはかぎらず、季節によってはある一定の距離にある経路の方が多くなることがある。

第5表 経路別雨の降り始め、終りおよび継続時間

		降 り 始 め					降 り 終 り				
		筑豊 (飯塚)	筑後 (佐賀)	後 (熊本)	北九州 (下関)	豊前 (大分)	筑豊 (飯塚)	筑後 (佐賀)	後 (熊本)	北九州 (下関)	豊前 (大分)
低気圧南朝鮮対馬海峡通過の場合 (35回)	福岡と同じ回数	8	11	4	6	4	11	9	2	11	1
	// より遅い //	24	12	18	21	27	14	15	22	12	19
	// より早い //	3	12	12	8	3	10	11	10	12	14
	雨なし	—	—	1	—	1	—	—	1	—	1
	平均時間 (一早い, 十遅い)	0	-0.6	+0.5	+0.6	+2	+0.9	+0.9	+1	+1	-0.1
低気圧九州北岸通過の場合 (17回)	福岡と同じ回数	5	2	—	—	—	1	6	1	2	2
	// より遅い //	11	9	11	14	14	6	4	9	6	3
	// より早い //	1	6	6	3	3	10	7	7	8	12
	雨なし	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	平均時間 (一早い, 十遅い)	+2	+0.5	+1	+3	+3	-0.9	+0.3	-0.6	-1	-2
低気圧九州中部通過の場合 (10回)	福岡と同じ回数	3	3	2	3	—	4	3	2	3	—
	// より遅い //	6	5	3	5	6	4	5	5	3	6
	// より早い //	1	2	5	2	4	2	2	3	4	4
	雨なし	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	平均時間 (一早い, 十遅い)	+2	+2	+0.2	+0.6	+2	+2	+0.2	-0.8	+0.2	+0.9
低気圧九州南岸通過の場合 (20回)	福岡と同じ回数	9	1	2	1	3	4	3	2	2	1
	// より遅い //	10	6	6	18	8	7	5	10	8	8
	// より早い //	1	13	12	1	9	9	12	8	10	11
	雨なし	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	平均時間 (一早い, 十遅い)	+0.9	-1	-1	+1	-0.7	-0.6	-2	+0.4	+0.6	-1
低気圧屋久島付近通過の場合 (25回)	福岡と同じ回数	4	6	2	3	7	5	6	2	5	—
	// より遅い //	18	8	8	18	10	14	8	9	12	17
	// より早い //	3	11	15	4	8	6	11	14	8	8
	雨なし	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	平均時間 (一早い, 十遅い)	+0.9	0	-0.8	+2	+0.7	+1	-1	-1	-0.4	+1
低気圧屋久島名瀬間通過の場合 (17回)	福岡と同じ回数	6	1	—	4	2	4	4	1	5	1
	// より遅い //	7	7	5	8	8	6	7	11	7	14
	// より早い //	3	8	10	3	6	6	5	3	3	1
	雨なし	1	1	2	2	1	1	1	2	2	4
	平均時間 (一早い, 十遅い)	0	-0.5	-2	+0.9	+0.6	+0.6	+0.3	+2	+0.7	+4
低気圧名瀬付近通過の場合 (16回)	福岡と同じ回数	6	3	3	3	2	5	6	—	3	1
	// より遅い //	6	7	5	7	5	8	5	11	9	9
	// より早い //	4	5	7	6	8	3	4	4	4	5
	雨なし	—	1	1	—	1	—	1	1	—	1
	平均時間 (一早い, 十遅い)	-0.3	+0.1	+1	+0.7	+0.5	+0.1	+0.2	+0.1	+1	+2

平均継続時間

	筑豊 (飯塚)	筑後 (佐賀)	後 (熊本)	北九州 (下関)	豊前 (大分)	福岡 (福岡)
低気圧九州の北方を通過	23	24	24	23	20	24
// 中部 //	20	19	21	20	21	21
// 南方 //	13	13	16	12	16	12

次に降雨原因別に雨の降り始め、終りおよび継続時間について、県内各地域と福岡との時間差を昭和30年から昭和32年までの3か年間の資料により、九州付近を通過した低気圧140例について経路別、地域別に調べると第5表のようになる。

Ⅱ 雨の降り始め、終り

(1) 低気圧が南朝鮮、対馬海峡を通る場合

降り始めは筑豊、北九州、豊前および熊本地方は福岡よりおそいことが多く、佐賀地方は半々になっている。降り終りは筑豊、筑後および豊前地方では福岡よりおそ

いことが多く、北九州地方は半々となっている。

(2) 低気圧が九州北岸を通る場合

降り始めは各地方とも福岡よりおそいことが多く、そのうち筑後地方は他の地方に比べ早いことがわかる。降り終りは佐賀地方が福岡と同じか早いことが半々で、熊本地方は逆におそいことが多くなっている。豊前、筑豊地方は福岡より早いことが多く、北九州地方は半々か多少早いことがある。しかしこれらの差は平均して30分~1時間くらいである。

(3) 低気圧が九州中部を通る場合

この場合は通過回数も少なくはつきりしないが、降り始めは熊本地方は福岡より早く、筑豊、北九州、豊前および佐賀地方はおそい方が多くなっている。降り終りは各地方とも福岡よりおそ目だが、筑豊および北九州地方は福岡と同じかおそいが半々となっており、平均では1時間以内の差である。

(4) 低気圧が九州南岸を通る場合

降り始めは筑豊地方は福岡と同じかおそいことが半々で、北九州地方はおそくなっている。筑後地方は早いことが多く、豊前地方はだいたい半々となっている。降り終りは、熊本地方は福岡よりおそくその他の地方は早くなっている。福岡とは30分～1時間の差である。

(5) 低気圧が屋久島およびその以南を通る場合

降り始めは筑後地方が福岡より早いことが多く、豊前地方が早いかおそいかがだいたい半々となっている。筑豊、北九州地方は一般に福岡よりおそくなっている。時間差にして30分～1時間くらいである。降り終りは各地方とも平均して福岡よりおそいことが多くなっている。しかしこれからの差はだいたい1時間くらいである。

Ⅲ 継続時間

降雨の継続時間は、各降雨ごとにまちまちであるが平均では次のようになる。

(1) 低気圧が九州の北方を通る場合、福岡、筑後地方が一番長く、次が筑豊、北九州で豊前地方が一番長短かくなっている。福岡と豊前地方との差は4時間となっているが、その他との差は1時間である。

(2) 低気圧が九州中部を通る場合、福岡、熊本および豊前地方が一番長く、佐賀地方が短かくなっている。福岡と佐賀地方との差は3時間となっているが、その他との差は1時間である。

(3) 低気圧が九州南方を通る場合、豊前、熊本地方が一番長く、次に佐賀、筑豊地方で福岡、北九州地方が一番短かくなっている。福岡との差は豊前、熊本地方で4時間、その他の地方で1時間である。

以上を要約すれば雨の降り始め、終りについては、低気圧の移動速度、大きさおよび強さなどが原因してか目だった地域差を示していない。一方継続時間については、はつきり傾向が現われており、低気圧が九州地方を通る場合には南方を通る場合より比較的継続時間が長くなっている。このことから低気圧が北方を通ったときの方がおよそ8～10時間くらい悪天が長びくことになる。

む す び

風と雨の各地域の特性について簡単な調査を行なったが、風の調査は1年たらずの資料であり、また資料の関係から北九州は下関が、筑後地方は佐賀が代表できるものとしたが、観測所の八幡（気象通報所の久留米、飛行場の首根などの長期間の資料を用い季節別に調査すればもっとはつきりした地域の特性がでると思われる。また雨量分布や継続時間は、平均的にはある特性を示すことがわかったが、

雨の降り始め、降り終りについてはそれはなどはつきりした特性は得られなかった。高気圧のように割合広い範囲の現象は、東西南北わずか90kmのような狭い範囲の予報にはそれほど問題にはならないが、低気圧や前線などのように割合狭い区域で起こる現象については、今後レーダーをより有効に活用すればある程度地域別の予報も解決すると考える。

気 象 の 英 語 (31)

33. symposium と panel discussion

シンポジウムという言葉は、ごろがよい為か、あるいは何か新鮮味が感ぜられる為か、盛んに使われる。語源はギリシヤ語で、ギリシヤ時代には、ご馳走を食べた後で、満ち足りた気分でお酒を飲みながら、雑談や、哲学談義などをする会、を指したそうである。現在では、A.C.D.によると、① a meeting or conference for discussion of some subject. ② a collection of opinions expressed, or arti-

cles contributed, by several persons on a given subject or topic. とある。つまり、題目をきめての座談会、または、その結果を集めたもの、である。また、とくに題目や話し手などをあらかじめきめておいて行なう座談会のことを、panel discussion という。この他、座談に限らず、ある目的での社交的な集まり（とくに夜の）を soiree という。これはラテン語からフランス語になり、つぎに英語に入ったもので、ボン・ソワールからご推察の通り、soir は夜という意味である。（有住直介）